

埼玉県における埴輪の受容と展開

大谷 徹

要旨 古墳の築造をめぐる“人、モノ、情報の流れ”を視点として、埼玉県における埴輪の受容と展開を、埴輪工人（製作者）の生産組織や技術伝習のあり方、さらに古墳への供給関係を中心に素描した。

儀器化の進行した有段口縁の壺形埴輪が、遅くとも前期中葉までには前方後方墳に樹立される。その後、頸部・胴部が伸長化した特異な壺形埴輪が、前期後半から中期にかけて円墳や方墳に採用され、多様なあり方を示す。本格的な円筒埴輪の出現は、中期初頭の雷電山古墳から出土した野焼き焼成のやや特異な形態の円筒埴輪である。中期前半には児玉地域に野焼き焼成の2次調整B種ヨコハケをもつ畿内的な円筒埴輪と格子タタキ技法を特徴とする円筒埴輪が併存し、地域的な展開が見られる。初期群集墳が広範に出現した中期後半、これまでの単発・臨時的な生産組織から、窖窯焼成によるB種ヨコハケ円筒埴輪の導入によって、埴輪生産が定着し、一部の有力墳には初期人物埴輪が採用される。

中期後葉における大型多条突帯埴輪を樹立した埼玉稲荷山古墳の築造を契機に、埴輪生産組織が再編され、埼玉古墳群を中心とした生産供給体制の成立こそが、最大の画期である。そして、後期前半には活発な地域間交流を反映する「工人が動く時代」をへて、後期後半に生出塚埴輪窯を中心とする拠点的生产窯体制が形成され「製品が動く時代」へと大きく転換した。しかし、埴輪生産は窯業として最高潮に達した段階に、突如として終焉を迎えてしまう。

1 はじめに

本論では“人の動きをモノから探る”試みのひとつとして、古墳のまわりに立て並べられた円筒埴輪や形象埴輪を題材に、埴輪工人（製作者）の生産組織や技術伝習のあり方、さらに古墳への供給関係などから、埼玉県における埴輪の受容と展開について俯瞰する。そして、古墳の築造をめぐる“人、モノ、情報の流れ”（和田 2004）から、東国における埴輪生産の特質を明らかにしたい。

2 埴輪の出現 —壺形埴輪と円筒埴輪の採用—

埼玉県で埴輪が最も早く出現したのは、県北西部に位置する児玉地域と県中央部の比企地域である。両地域とも初現期古墳として前方後方墳が盛んに造営されており、児玉地域の本庄市鷲山古墳（前方後方墳：墳長 60 m）や比企地域の熊谷

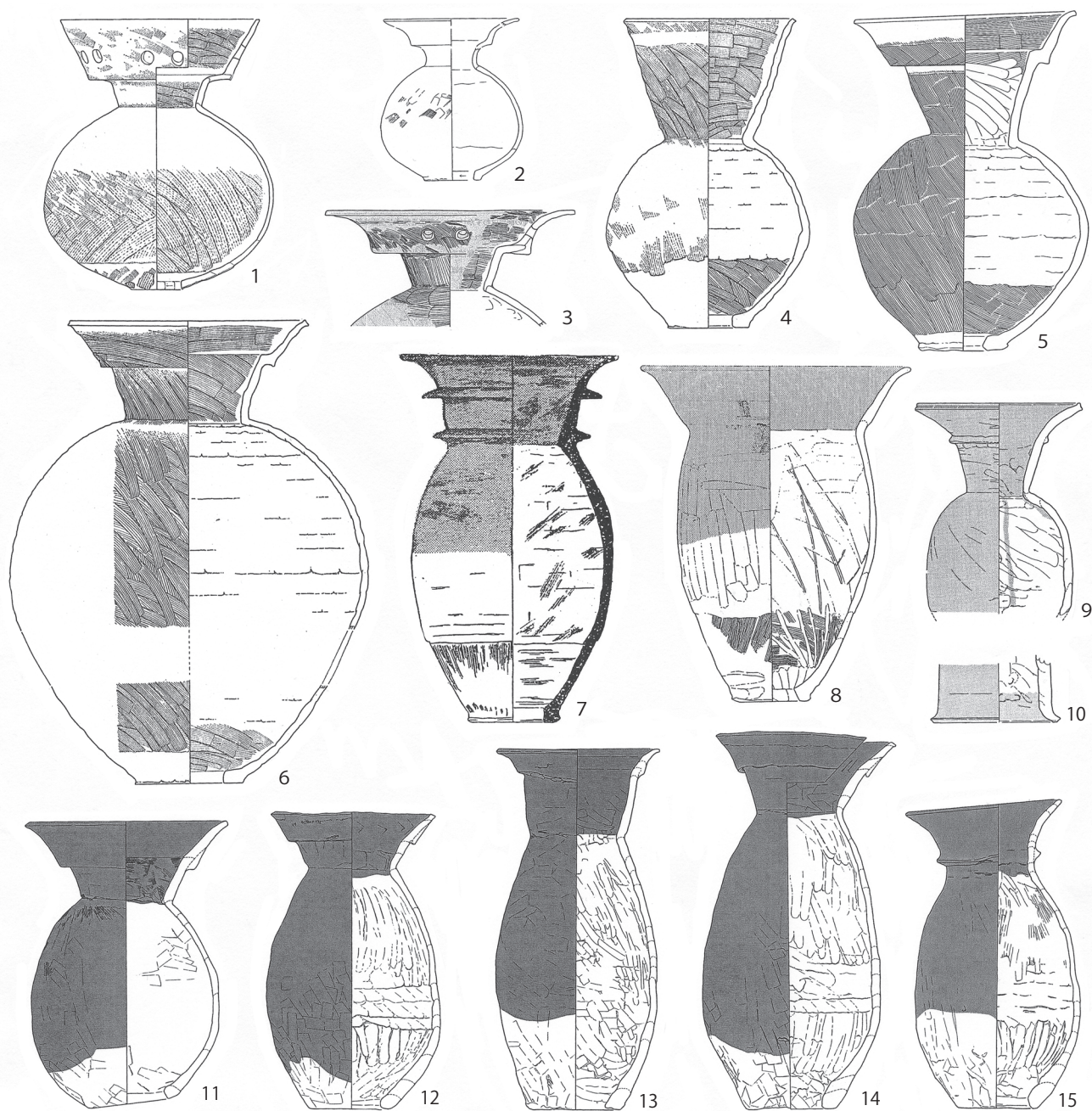
市塩古墳群第Ⅰ支群第1号墳（前方後方墳：墳長 36 m）から焼成前に底部を穿孔した壺形埴輪（＝底部穿孔壺形土器）が出土している。トレンチ調査のため壺形埴輪の配列形態の詳細は明確でないが、墳丘上に底部穿孔された同一規格の壺が配置されていたと考えられる。細部では異なるものの口縁部に小円孔を穿孔した大型の有段口縁壺を出土しており、葬送具として特殊化（特化）の進んだ段階のものである。遅くとも前期中葉（4世紀前半）には出現している。

こうした有段口縁壺の口縁部や胴部に巴形や円形などの透孔をもつ壺形埴輪は、山梨県甲斐鉾子塚古墳（前方後円墳：墳長 169 m）、群馬県朝子塚古墳（前方後円墳：墳長 123.5 m）などの大型前方後円墳や群馬県堀ノ内DK-4号墳などの小型古墳からも出土しており、定型化した円筒埴

輪普及以前の埴輪祭祀導入期の様相を考えるうえで重要である（橋本 1987）。

また、同時期の前方後方形周溝墓や方形周溝墓の中にも焼成前の底部穿孔壺形土器を列状に配列した例が知られており、被葬者間における序列化の道具立てのひとつとして壺形埴輪が受容された様相を読み取ることができる（柿沼 1996、篠田 2008）。

壺形埴輪は畿内系や東海系（パレス壺型・伊勢型）などの複数の系統をもちながら、九州から東北まで広域に分布している。前期古墳からの出土例が多く、円筒埴輪の伝播・普及によって、その数は減少するが、畿内でも中期まで一定の割合で存続している（塩谷 1992、赤塚 2001・2003、山田 2015）。入間地域に所在する銅鏡や石釧などを出土した方墳（25 × 20 m）の川越市三変



1 鷺山古墳 2・3 塩古墳群第Ⅰ支群第1号墳 4～6 三変稻荷神社古墳 7・8 川輪聖天塚古墳
9・10 中道1号墳 11～15 塚越稻荷塚古墳

第1図 埼玉県内出土壺型埴輪（S=1/10）

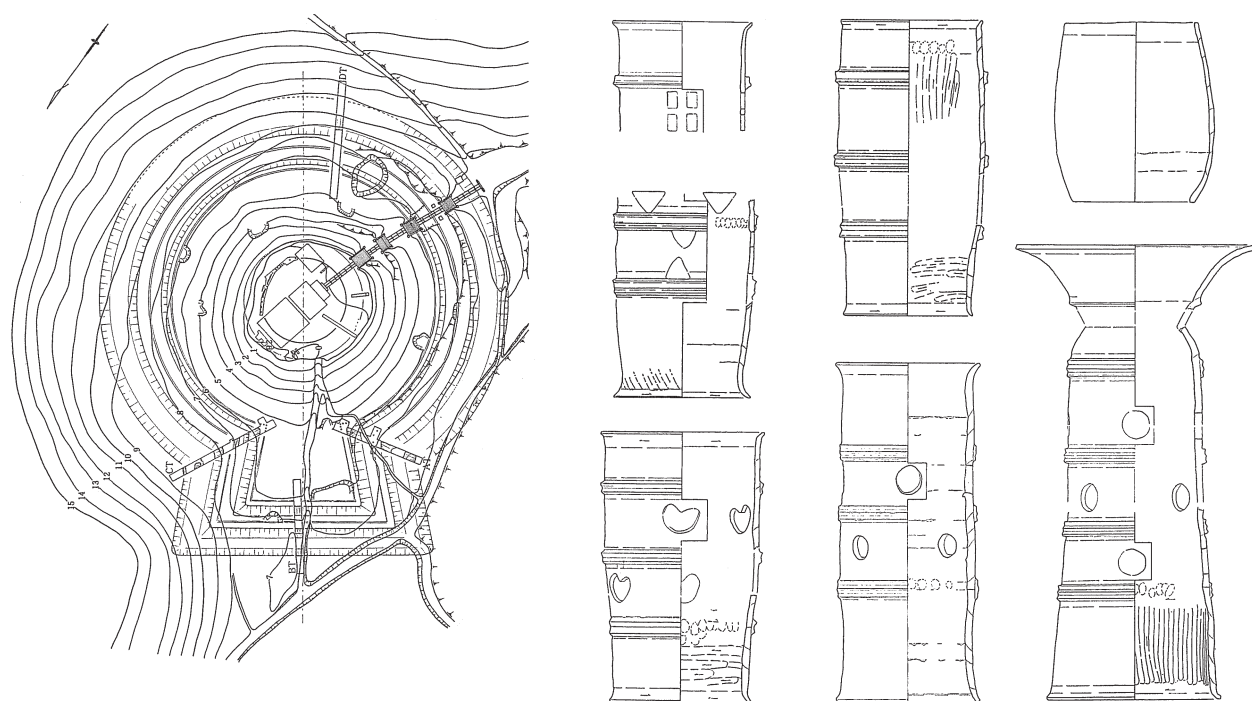
稲荷神社古墳では、ハケメを多用した有段口縁と単口縁の二形態の壺形埴輪が圍繞配列されていた(埼玉県県史編さん室 1986、岡田 2013)。児玉地域では、中期初頭の美里町川輪聖天塚古墳(円墳：径 38 m)から、口縁部と頸部に突帯をめぐらす特徴的な口縁形態と大きく外反する口縁部を有する甑形の二形態の長胴化した壺形埴輪が出ている。このほかにも、倒立技法によって成形された底径の大きな筒形埴輪が含まれていた可能性が高い(大谷 1998)。近隣では同時期の美里町中道 1 号墳(円墳：径約 25 m)からも、口縁部がラッパ状に大きく開き、中位に断面三角形の突帯をめぐらした頸部の伸長化した、胴部の張りの弱い長胴の壺形埴輪が出土している。

一方、荒川右岸の江南台地西部に位置する吉野川源流付近の寄居町塚越稲荷塚古墳は、一辺 30 m 前後の方墳と推定され、千葉県鶴塚古墳出土例(萩原 1994)に類似する東関東的な長胴化の顕著な壺形埴輪が出土している(小林 2010)。口縁部形態には有段口縁を呈するものと、単口縁で頸部に突帯をめぐらす二形態が存在する。壺形埴

輪終末段階の良好な資料で、中期中葉(5 世紀前葉)に位置づけられている(蓼沼 2019)。

県内における本格的な円筒埴輪の初現は、東松山市三千塚古墳群の雷電山古墳出土の黒斑をもつ円筒埴輪である。東方への眺望のきく丘陵頂部に築造された全長 86 m の帆立貝式古墳で、葺石をもつ 3 段築成の墳丘に周堀を備え、円筒埴輪列を墳頂平坦面の縁辺部、2 面の墳丘中段テラスおよび外堤部に四重に配し、さらに墳頂部にも主体部を圍繞する方形埴輪列をもつとされている。

雷電山古墳の埴輪には B 種ヨコハケはもとより埴輪に通有のハケメが認められず、外面はケズリのために丁寧なナデによって仕上げられており、在地の土師器工人が臨時に徴発された単発的な生産であったと想定されている(埼玉県県史編さん室 1986)。帆立貝式古墳の埴形から中期初頭(4 世紀末葉～5 世紀初頭)に位置づけられている。しかし、特殊器台に系譜の追える倒立技法による成形技法や千鳥配列の円形・三角形・ハート形・格子形などの多様な透孔、3 ないし 4 条の稜をもつ幅広の多稜突帯など、前期的な埴輪の要素を残存



第 2 図 雷電山古墳と出土遺物(古墳 1/1600、遺物 1/16)

する円筒埴輪のほか、楕円形円筒埴輪、樽形埴輪などの存在から、築造時期が前期後半から末葉に遡り得る可能性は大きい。いずれにしても県内では雷電山古墳の造営を画期として、埴形や埴輪、葺石、段築などのうえでも、より畿内的な色彩の濃い古墳が築造されたといえる。

3 埴輪生産にみえる渡来系技術

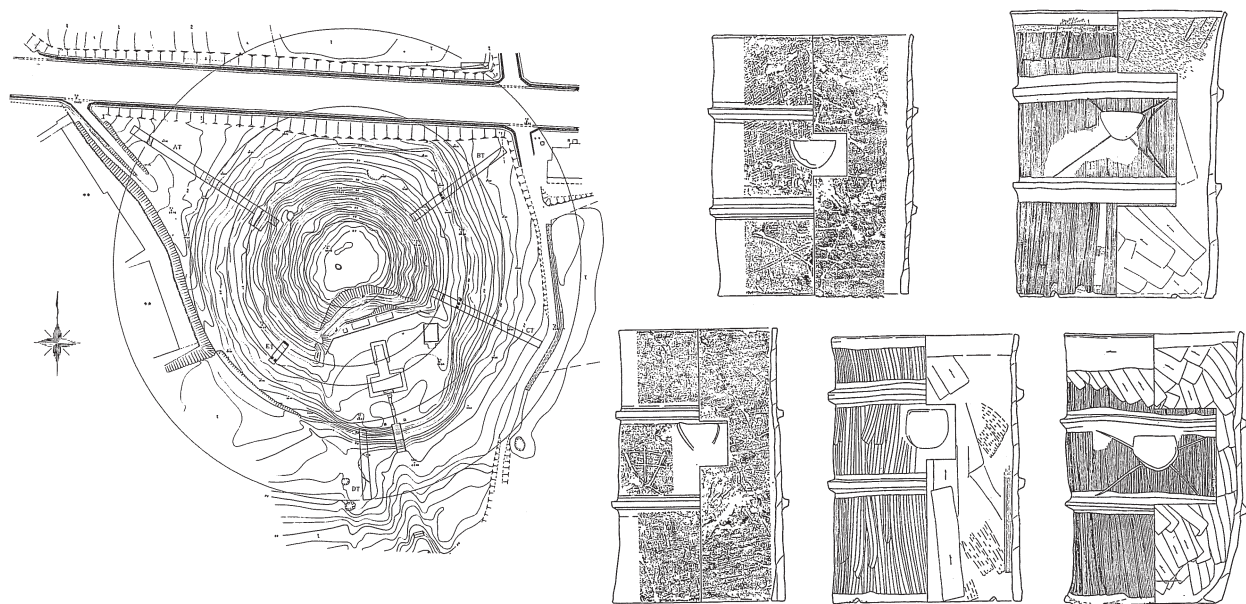
—格子タタキ埴輪と渡来系工人—

児玉地域における窖窯出現以前の埴輪には、本庄市長沖古墳群の長沖 157 号墳(円墳:径 32 m)、美里町志渡川古墳(円墳:径 40 m)の外周 2 次調整に B 種ヨコハケをもつ畿内系の円筒埴輪と、本庄市生野山將軍塚古墳(円墳:径 60 m)、同金鑽神社古墳(円墳:径 67 m)、同公卿塚古墳(造出付円墳:径 50 m)の 3 基の大型円墳から出土した格子タタキ技法による特徴的な円筒埴輪が展開している。つまり、系統の異なる埴輪生産が錯綜した状況で展開しているのが、この時期の大きな特徴である。

B 種ヨコハケ埴輪を出土した志渡川古墳は、短甲と草摺の破片を含む甲冑形埴輪や家形埴輪などの形象埴輪、鳥形土製品などが伴う。円筒埴輪、

朝顔形埴輪は、外面 2 次調整に B 種ヨコハケを用いている。甲冑形埴輪の草摺表現は、群馬県白石稲荷山古墳(前方後円墳:墳長 140 m)のものに近似しており、地理的に群馬県西部の強い影響が考えられる。白石稲荷山古墳の場合、甲冑形埴輪や家形埴輪などの形象埴輪と B 種ヨコハケをもつ円筒埴輪の一群を作った畿内系の工人と在地の工人が協業しながら埴輪生産に従事する体制が想定されている(高橋 1994)。同様に志渡川古墳でも形象埴輪の全容は不明であるため判然としないが、畿内から派遣された工人が形象埴輪や B 種ヨコハケ埴輪を主体的に製作したか、あるいは白石稲荷山古墳などの有力古墳の築造プロジェクトに参画し、新来の埴輪技術を習得した経験のある在地工人が、指導的な立場として生産にあたるような生産組織であったと復元される。ただし、周辺の様相を見ても、当該期は単発的な生産段階にとどまっていたようである。

児玉地域における中期前半(5 世紀前半)の円筒埴輪を特徴づける格子タタキ技法をもつ円筒埴輪は、生野山將軍塚古墳における円筒埴輪の詳細は明らかでないものの、金鑽神社古墳では外面調整に、ナデの後に格子タタキを施すもの、ナデに



第3図 金鑽神社古墳と出土遺物(古墳 1/1600、遺物 1/16)

よるもの、1次タテハケの後にナデを加えるもの、1次タテハケのみによるものがあり、多様な技法が混在している。

また、公卿塚古墳では格子タタキの後にタテハケあるいはタテナデを加えるもの、1次タテハケの後に2次調整としてB種ヨコハケを加えるもの、1次タテハケのみによるものが確認される。

格子タタキによる調整が主体を占める長野県土口將軍塚古墳（前方後円墳：墳長67.7m）出土例とは異なり、児玉地域に認められる格子タタキ技法は、ハケ、ナデなどの伝統的な埴輪製作技法と共伴しつつ併存している点が大きな特徴といえる。格子タタキ技法については、その起源を初期須恵器や韓式系軟質土器などに求める意見があるため即断はできないが、製作に渡来系工人の関与があった可能性は高い。

こうした寄せ集め的で多様な技法から構成された様相から推して、在地の埴輪工人の中に、格子タタキ技法を保持する半島系の土器生産技術者が臨時に徴発され混在しているような生産体制が復元されている（太田2008）。

児玉地域は、東国でもいち早くカマドが導入されている。と同時に畿内の布留式系甕や東海の宇田型甕などの外来系土器をはじめ、初期須恵器や韓式系軟質土器に系譜をもつ平底鉢や多孔式大型甑などが出土しており、渡来系の人々を含む、畿内・東海からの人の移住によって、手工業生産や新来の土木・灌漑技術の導入が図られ、地域開発が隆盛した（大谷2007）。こうした歴史的脈絡の中に埴輪生産の展開も位置づけられる。

4 竈窯焼成B種ヨコハケ埴輪と形象埴輪の導入

一初期群集墳の展開と埴輪生産組織の確立一

中期中葉ないし後葉（5世紀中葉～後葉）にかけて、野焼き焼成に変わって竈窯で焼成された外面2次調整にB種ヨコハケをもつ円筒埴輪が、本庄市長沖14号墳（円墳：径14m）、旭・

小島古墳群の本庄市三笠山2号墳（円墳：径22m）、同上前原5号墳（円墳：径26m）、同杉ノ根7号墳（円墳：規模不詳）、塚合古墳群の本庄市東小学校1号墳（円墳：径19m）、同東小学校2号墳（円墳：径12m）、同塚合46号墳（円墳：時期不詳）、生野山古墳群の本庄市生野山9号墳（円墳：径42m）、同生野山10号墳（円墳：径21m）、同生野山14号墳（円墳：径17m）、美里町諏訪山古墳（帆立貝式古墳：墳長39m）、同熊谷後5号墳（円墳：径15m）、塚本山古墳群の美里町塚本山73号墳（円墳：径12m）、同塚本山77号墳（円墳：径14m）などの児玉地域の中・小型古墳に集中して見られる。

このうち生野山9号墳では、武人や女子を含む人物埴輪や盾形・馬形埴輪など東国最古段階の形象埴輪が出土している。竈窯焼成技術の導入に伴い、人物埴輪を中心とした形象埴輪が出現している点は注目される（金井塚1994）。

児玉地域の竈窯焼成による円筒埴輪の多くは、半円形透孔の2条突帯3段構成が主体で、口縁部外面に「×」や「入」字形のヘラ記号をもち、群馬県域の強い影響が認められる。当該期に築造を開始する初期群集墳の中に埴輪を樹立する古墳が増加することから、埴輪生産体制の整備が図られたことを物語っている。おそらく須恵器生産技術の竈窯焼成技術の導入に伴い、これまでの一回性の高い、随時編成型の埴輪生産体制の段階から脱し、拠点をもつ埴輪生産者集団への活動軌跡を追うことができるようになる。

比企地域では、雷電塚古墳の築造以降、野焼き焼成による2次焼成B種ヨコハケ埴輪の段階は空白になっているが、中期後半（5世紀後葉）には東松山市諏輪山33号墳（円墳：径30m）、同柏崎17号墳（円墳：径20m）をはじめ、荒川と入間川の合流部付近の自然堤防上に立地する川島町三竹古墳群で竈窯焼成の2次調整B種ヨコハケ円筒埴輪が出土している（大谷2011）。半

円形透孔が主体である児玉地域に対し、円形透孔を主体とした2条突帯と3条突帯の両者が確認され、突帯間隔が10cm前後に統一されている。大阪府百舌鳥・古市古墳群で完成されたB種ヨコハケ技法が直接的に伝播している可能性が強い。荒川を境として南北間で地域差が顕著にみられることから、東山道ルート、東海道ルートなどの多様な系譜関係を反映しているものと考えられる。

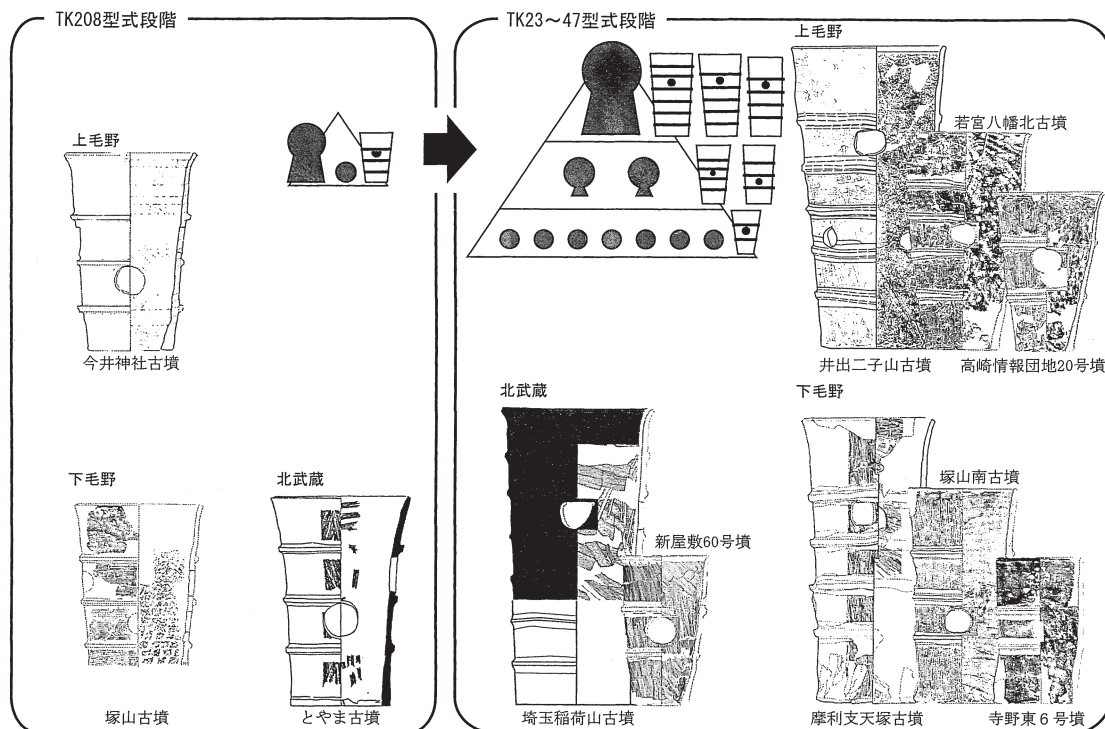
このほか、県南部のさいたま市白楯塚山古墳(円墳：径30m)でも精美的なB種ヨコハケを施した3条4段もしくは4条5段の円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。突帯間隔は9cm前後と幅狭く、円形透孔をもつ畿内的なものである。これに伴って家形・盾形埴輪と人物埴輪(女子・力士?)が出土している。古墳の築造年代は、生野山9号墳とほぼ同時期中期後葉に位置づけられる。

5 埼玉稲荷山古墳と大型多条突帯埴輪の出現

辛亥年金錯銘鉄剣の出土で著名な埼玉稲荷山古墳(前方後円墳：墳長120m)は、多条突帯を

もつ大型の円筒埴輪が埴丘をめぐる、後円部の墳頂部と長方形の二重周堀の中堤造出し部に豊富な形象埴輪群が樹立していたことが明らかにされている。円筒埴輪は6条7段構成で、部分的に2次調整ヨコハケを用いる個体がある。形象埴輪は女子・武人・弾琴などの人物埴輪をはじめ、家形・盾形・動物埴輪などから構成され、以後100m級の前方後円墳が継続して築造される埼玉古墳群において、本格的な埴輪樹立の嚆矢となった(埼玉県立さきたま史跡の博物館2018)。

円筒埴輪は大きく橙褐色系と白色系に区分され、胎土や焼成の違いから複数の異なる生産地から埴輪の供給がおこなわれた可能性が指摘されている(山崎2001、城倉2011)。また、埼玉古墳群周辺の利根川流域の行田市とやま古墳(前方後円墳：墳長70m)、熊谷市横塚山古墳(前方後円墳：墳長50m)でも2次調整にヨコハケを施した円筒埴輪が客体的に出土している。このように埼玉稲荷山古墳の築造を契機に、在地の伝統的な埴輪生産集団が再編され、埼玉古墳群を中心



第4図 古墳時代中期後半における埴輪秩序の形成(山田2011より)

としたその周辺部に鴻巣市生出塚埴輪窯跡、熊谷市姥ヶ沢・権現坂埴輪窯跡などの比企系窯、利根川右岸の未知窯（とやま古墳系）などの埴輪生産地が造られ、河川交通を利用して、政治的従属関係を結んだ中小首長に対し、その見返りとして埴輪を分配するネットワークが構築されたと推定されている（若松 2000、山崎 2001）。

かつて埼玉古墳群と周辺の古墳の埴輪について検討した増田逸朗は、規模の大きな古墳には大型円筒埴輪が、規模の小さな古墳には小型円筒埴輪が樹立され、古墳の規模と埴輪の器高（条数）が相関関係を示し、古墳のランクに応じた条数の規制が認められることを指摘した（増田 1987）。いわゆる「埴輪規制論」である。つまり、「古墳時代中期後葉の上毛野、北武蔵では、100 m 級の前方後円墳を頂点として、40～60 m 級の帆立貝型前方後円墳、群集墳を構成する 5～20 m 規模の円墳といったピラミッド形の階層構成が形成され」、墳丘規模に応じて埴輪の使い分けがなされていたことが指摘されている（山田 2015）。

埼玉稲荷山古墳の築造とほぼ同時期の群馬県では、高崎市保渡田古墳群に墳長 108 m の前方後円墳の井出二子山古墳が築造されている。これらの古墳は畿内の奈良県狐井城山古墳（前方後円墳：墳長 140 m）とほぼ同規模であり、当該期にあつては大阪府岡ミサンザイ古墳（前方後円墳：墳長 242 m）に次ぐ規模の古墳である。

こうした畿内中枢の埴輪と極めて類似した大型多条突帯円筒埴輪（王陵系埴輪）を製作し、樹立する背景には、畿内と北武蔵を行き来した少なからぬ埴輪工人の姿を垣間見ることができる（山田 2008）。おそらく在地の埴輪工人が、労働力の提供あるいは技術の習得を目的として大王墓の埴輪生産に動員されたのであろう。その傍証として大阪府新池埴輪窯跡からは関東地方の埴輪工人が携えて行ったと考えられる鬼高式土器の甕が出土している。

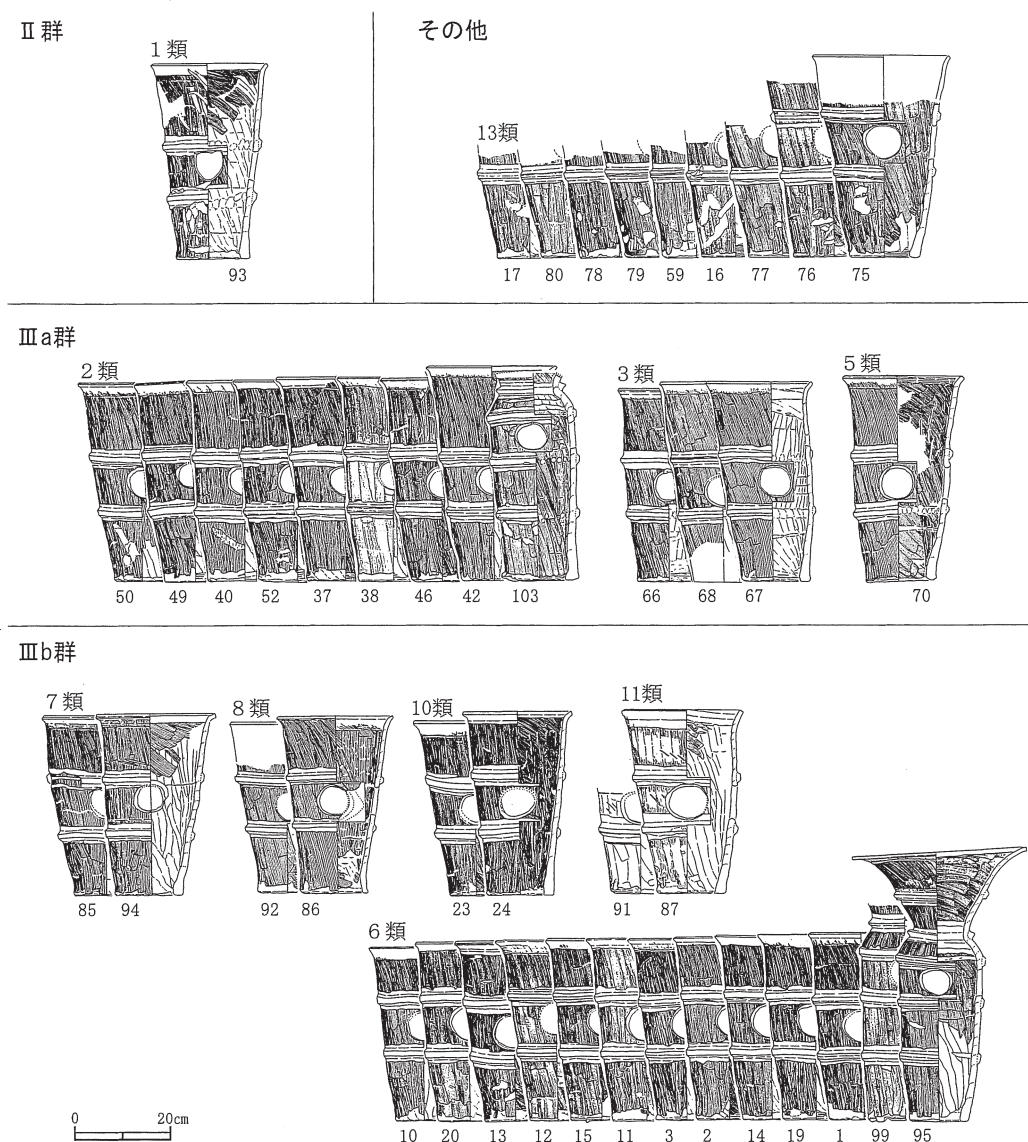
6 埴輪生産の地域的展開

現在、埴輪研究の大きな潮流として、同工品識別を基礎とする方法論が盛んに実践され、埴輪生産集団の構造分析に大きな成果を挙げている（犬木 1995・2005 ほか、城倉 2009）。

同工品論とは、刷毛目の同定と工人の癖の把握から同一工人の製作した同工品を識別し、ある古墳の埴輪工人を同定するだけでなく、埴輪生産集団の編成構造の実態、窯と古墳の関係、すなわち埴輪の生産・供給のあり方、埴輪生産集団の活動軌跡の追求などさまざまな問題を具体的に検討し、解き明かす方法論である。その研究成果のひとつとして埼玉古墳群との密接な関係をもつ、中期末葉から後期初頭を中心に築造された鴻巣市新屋敷古墳群に関する城倉正祥の分析事例を紹介しておく（城倉 2009）。

新屋敷古墳群の主墳である帆立貝式古墳の新屋敷 60 号墳（墳長 43 m）では、円筒埴輪の様相に多様性が顕在化している。城倉による刷毛目分析の結果 1～13 類の同工品類型が確認され、それらは 2 条突帯円筒埴輪の変遷過程を踏まえ、大きく 4 群に大別されている。ここでは新屋敷 60 号墳の埴輪生産の実態についてだけ述べると「前代までに埴輪生産に携わっていた経験のある工人が、埼玉稲荷山古墳の埴輪生産にともなって結集され、その後に続く継続的埴輪生産を開始した状況を示している」と推論した（城倉 2009）。つまり、異なる技術系譜をもつ埴輪工人が集まって、一古墳の埴輪を協業して製作する状況へと大きく推移し、その背後に在地における埴輪工人の再編を読み取り、継続的な生産拠点形成への道程を読み解いている。

次に、当該期の埴輪生産に関わる技術や情報の伝播のあり方について考えてみたい。6 世紀前半に築造された東松山市下松 5 号墳（帆立貝式古墳：墳長 22 m）から出土した弓を貼りつけた板を肩にのせる軽装の武人埴輪（江原・長井 2004）は、



第5図 新屋敷60号墳出土埴輪の同工品類型形態比較（城倉 2009 より）

奈良県荒時古墳出土例（帆立貝式古墳：墳長 30 m、千賀 2008）などの畿内では出現した埴輪をモデルとしつつ、在地の埴輪工が髪形や被り物などの細部の表現をアレンジしながら製作した作品と評価される。つまり畿内を情報発信源とする共通表現の人物埴輪の存在は、前述したような「上番」に近い形で、東国の工人が畿内へ技術伝習に赴き、新しい技術・情報を習得して、帰郷した後に、在地で製作されたのであろう（註1）。

また、円筒埴輪に見られる突帯の割付設定技法や板押圧技法の共通性など、広い地域において連動した動きを示すことからすれば、埴輪工が常

に列島規模の情報伝達のネットワークの中で、後期の埴輪生産が各地域社会の状況に応じて多層的・跛行的に定着していった状況が指摘されている（城倉 2009）。さらに関東の工人の足跡を、遠く東北にまで辿ることのできる共通表現や形態的特徴を示す人物埴輪や円筒埴輪の存在も指摘されている（藤沢 2002）。こうした活発な地域間交流の実態を窺わせる例として、深谷市千光寺1号墳（帆立貝式古墳：墳長 28.1 m）では、片岩粒を含む胎土の特徴から生産地は地元周辺と考えられるが、出土した人物埴輪の腕の成形に見られる木芯中空技法や甲冑武人埴輪の小札や顔の表現

が、茨城県北部に分布する久慈型人物埴輪に酷似していることから、直線距離にして110km以上離れた両地域間を移動する埴輪工人の動向が想定されている（山崎 2004、稲村 2019）。おそらく後期前半には畿内・東海などの西方の先進地域との交流だけでなく、関東から東北の各地を移動する工人の活発な交流の実態が予想される。

まさに“人が動けば情報が動く時代”であったのである。

7 埴輪の拠点生産と遠距離供給

関東では後期後半（6世紀後半）に埴輪樹立が最盛期を迎えると同時に、固定的な生産拠点の成立を背景にして、埴輪生産集団の活動領域が明確化してくることが知られている（高橋 1994）。とりわけ群馬・埼玉県における当該期の小型円筒埴輪における変化のベクトルは、突帯の退化、底部調整の盛行、そして最下段の伸長化という変遷過程を一樣にみせ、相互に活発な交流があったことが窺われる。埼玉県では、生出塚窯を中心とした拠点的生産窯の成立を背景に、「拠点・衛星型二重構造」の生産体制が提唱され（城倉 2011）、後期後半には拠点的生産窯として、東京湾方面への遠距離供給が顕在化する。

千葉県山倉1号墳（前方後円墳：墳長46m）の埴輪は、直線距離にして約80km離れた生出塚窯跡から供給されていることが同工品分析によって確かめられ、さらに生出塚遺跡P地点・46地点内の窯で焼成された蓋然性の高いことまでが突き止められている（小橋 2005）。また、同工品類型から埴輪の製作に携わった工人の人数も最低13人を数え、その生産体制は不均等な分担で埴輪製作が行われ、そして特定の工人がほとんどの形象埴輪に加えて多くの円筒埴輪を作っている実態が明らかになった。こうした特定工人が独りで埴輪製作に携わった不均等な作品数は、力量差というよりは、成形・焼成・燃料集めなど種々の役

割分担の結果生じたものである。小橋健司は、このような埴輪生産体制を「エース工人体制」と呼んでおり（小橋 2009）、より専門化した埴輪工人の姿を見ることができる。中でも人物埴輪の全身像は“埴輪名人”の作品と呼ぶに値しよう。

一方で遠距離供給は、拠点生産地の専門的な埴輪工人が地域首長から自立していく姿を反映していると捉えられている（高橋 1994）。要するに遠距離供給を可能とした埴輪生産体制の成立こそが、諸豪族が領有したとされる部曲などの手工業部の成立を前提としたとする立場である（車崎 2004）。このように埴輪生産をめぐり後期前半は「工人が動く時代」、後期後半は「製品が動く時代」へと埴輪生産体制が大きく転換したことが指摘されている（城倉 2009、伝田 2015・2018）。

8 埴輪生産の終焉

—中の山古墳の須恵質埴輪壺をめぐって—
埼玉古墳群における最後の前方後円墳である中の山古墳（墳長80m）からは須恵質埴輪壺（＝有孔平底壺系円筒形土器）と呼ばれる特殊な土器（儀器）が出土している。須恵器の製作技法で作られた平底の胴の長い壺で、口縁部は外反しながら開き、底部は焼成前に円形に削り抜かれている。あたかも古墳時代前期の壺形埴輪へ「先祖がえり」したような代物である。中の山古墳から出土した須恵質埴輪壺の一部は、寄居町末野遺跡第3号窯跡から供給されたことが判明している（福田 1998）。おそらく、荒川を利用した河川交通によって、埼玉古墳群まで運ばれたのであろう。

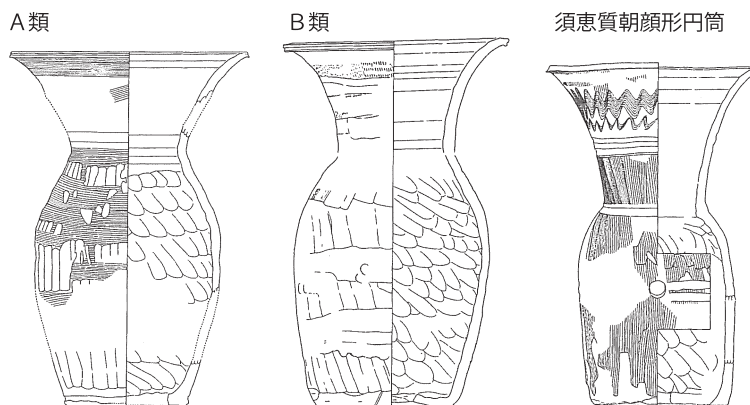
同様の須恵質埴輪壺が、国内では九州の大分県朝日天神山2号墳、福岡県次郎太郎2号墳から出土しているほか、朝鮮半島の羅州伏岩里2号墳、チュンナン遺跡などでも類似する土製品の存在が知られている（太田 2006）。彼我との対比は一先ずおくとしても、何故、中の山古墳から朝鮮半島に出自をもつと想定される須恵質埴輪壺が樹立

されたのであろうか。その背後に在地の須恵器生産組織に編入された朝鮮半島の亡命工人が埴輪の代用品として製作したと、積極的に評価する見解もある（若松 2001）。しかし、当時の朝鮮半島をめぐる社会情勢の中に東国の首長層が積極的に関与していた可能性も十分に考慮したうえで（内山 2013、太田 2013）、埴輪生産終焉の歴史的意義を慎重に議論していく必要がある。

同様に、埴輪をもたない最終末の前方後円墳として熊谷市大境南 1 号墳（墳長 34 m）では、須恵器の提瓶が古墳の周堀からほぼ等間隔で出土しており、埴輪の代替品として埴丘裾に配置されていた（熊谷市 2018）。埴輪生産終了後における各地域社会における動向の多様性を考えるうえで興味深い事例である（註 2）。

関東では、後期末の 6 世紀末頃をもって古墳における埴輪樹立の風習が一斉に終了し、これに伴って埴輪生産の活動も停止する。ほぼ同時に汎列島規模で前方後円墳の造営も停止されており、これまでの前方後円墳を中心とした古墳の序列化や葬送儀礼・葬送観念の刷新の背景に、推古朝における国内政策の変革を求める意見が強い（新納 1984）。隋王朝の成立と高句麗への出兵など緊迫する東アジア情勢のなかで、国内を一新し対外情勢に対応する体制を確立することが急務とされたのであろう（関 2019）。

このように関東の埴輪生産体制は、恒常的生



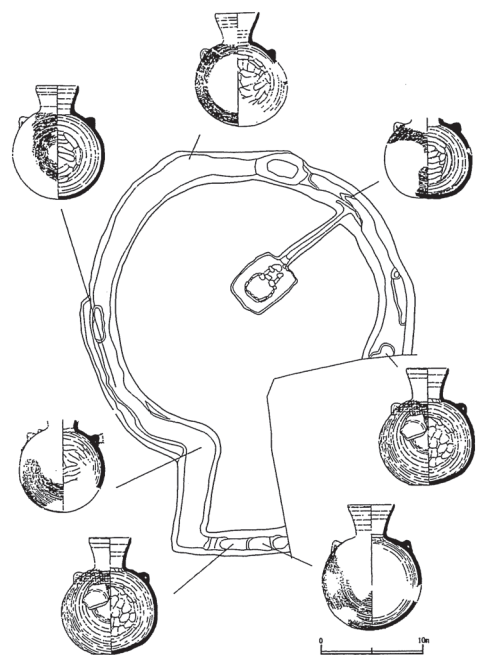
第 6 図 中の山古墳出土須恵質埴輪壺 (S=1/10)

産と遠距離供給を達成し、窯業としては最高潮に達した段階で突如として終焉を迎える（廣瀬 2019）。その時々社会や権力の要請に翻弄されながらも強かに生き抜いた埴輪工人であったが、生産組織の解体を余儀なくされ、ある地域では瓦や須恵器などの別の窯業生産に編入された集団もあったと想定されている。しかし、工人たちのその後の姿は要として知れない。

9 おわりに

埼玉県における埴輪の受容と展開、その変遷過程を俯瞰することを通して、埴輪工人（製作者）の性格について、生産組織や古墳への供給関係を中心に見てきた。冒頭でも述べたように“人の動きをモノから探る”試みとして、果たして十分な検討ができたかどうか、はなはだ心許ない。

一古墳における埴輪の詳細な分析から出発する研究活動を継続するとともに、体系化を指向した統合的な研究へと自身の埴輪研究を昇華させることを今後の目標としたい。



第 7 図 大境南 1 号墳の提瓶出土分布図（熊谷市 2018 より）

謝辞

本論は、埼玉県立川の博物館 平成 21 年度特別展「埼玉圏の原始・古代人一人の動きをモノから探る」の関連企画として、平成 21 年 8 月 1 日（土）に開催された講演会「古墳をめぐる人、モノ、情報の流れ―埴輪からみた古墳時代史―」の発表要旨を基に、最近の研究成果を踏まえ、大幅に加筆修正したものである。

遅ればせながら、当時特別展を担当された中村倉司氏には、発表の機会を与えていただき心よりお礼を申し上げます。

図版出典

第 1 図：1・4・6 埼玉県県史編さん室、2・3 新井 2011、5 岡田 2013、7・8 菅谷 1984、9・10 長滝・中沢 2004、11～15 小林 2010 を基に作図 第 2・3 図：埼玉県県史編さん室 1986 より作図 第 4 図：山田 2011 より転載 第 5 図：城倉 2009 より転載 第 6 図：若松 1989 より作図 第 7 図：熊谷市 2018 より転載

引用・参考文献

- 赤塚次郎 2001「壺形埴輪の復権」『史跡青塚古墳調査報告書』犬山市埋蔵文化財調査報告書第 1 集
赤塚次郎 2003「もう一つの埴輪の起源」『古代近畿と物流の考古学』学生社
新井 端 2011『埼玉県指定史跡「塩古墳群」の調査』熊谷市埋蔵文化財調査報告書第 10 集
稲村 繁 2019「人物埴輪からみた東国の埴輪生産と供給―専門工人集団の変遷と系譜、そして遠隔地供給の背景―」『博古研究』第 58 号 博古研究会
犬木 努 1995「下総型埴輪基礎考」『埴輪研究会誌』第 1 号 埴輪研究会
犬木 努 2005「下総型埴輪再論」『埴輪研究会誌』第 9 号 埴輪研究会
犬木 努 2008「円筒埴輪の形態論―突帯配置と透孔穿孔―」『現代の考古学 4 生産と技術の考古学』朝倉書店
内山敏行 2013「將軍山古墳の武器・武具」『古代の豪族～將軍山古墳とその時代～』
埼玉県立さきたま史跡の博物館
江原昌俊・長井正欣 2004『上松本遺跡（第 2 次）』埼玉県東松山市文化財調査報告書第 2 集 東松山市遺跡調査会
太田博之 1992「埴輪製作における特殊技法」『考古学ジャーナル』No. 349 ニューサイエンス社
太田博之 2000「古墳時代の北武蔵における渡来系集団の動向」『考古学ジャーナル』No. 459 ニューサイエンス社
太田博之 2006「埼玉中の山古墳出土の有孔平底壺系円筒形土器」『考古学雑誌』第 90 巻第 2 号 日本考古学会
太田博之 2008「古墳時代中期東日本の埴輪製作技術と渡来工人」『日本考古学』第 25 号 日本考古学協会
太田博之 2013「東日本における古墳時代後期の朝鮮半島系遺物と首長層の動向」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 179 集
大谷 徹 1998「埼玉県 前期古墳から中期古墳へ」『第 3 回東北・関東前方後円墳研究会大会《シンポジウム》前期古墳から中期古墳へ』
大谷 徹 2007『夏目／夏目西／弥藤次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 346 集
大谷 徹 2011『三竹遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 384 集
岡田賢治 2013『三変稲荷神社古墳第 2 次発掘調査報告書』川越市遺跡調査会調査報告書第 43 集
川越市教育委員会・川越市遺跡調査会
柿沼幹夫 1996「北関東①埼玉県」山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社
金井塚良一 1994「人物埴輪の伝播と河内」『東国と大和王権』吉川弘文館
熊谷市 2018『熊谷市史』通史編上巻 原始・古代・中世
車崎正彦 2004「埴輪生産体制論雑感」『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター調査報告書第 85 集

註 1 上松本 5 号墳の弓を貼りつけた板を肩にのせる軽装武人埴輪について検討した江原昌俊は、現状では畿内の出土例よりも関東や東北の出土例の方が時期的に古く位置づけられることから、必ずしも情報発信源は畿内ではない可能性もあると指摘している。

註 2 栃木県の壬生車塚古墳（円墳：径 84 m）や下石橋愛宕塚古墳（造出付円墳：径 82 m）でも、墳頂部、墳丘平坦面、周堤上などに須恵器甕が埴輪のように樹立されていたことが、最近の調査で明らかにされている。

- 小橋健司ほか 2004『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター調査報告書第 85 集
- 小橋健司 2005「山倉 1 号墳出土埴輪から見た生出塚遺跡」『埴輪研究会誌』第 9 号 埴輪研究会
- 小橋健司 2009「埴輪の生産体制に迫る 千葉県市原市山倉 1 号墳」『国宝武人ハニワ、群馬へ帰る！』
群馬県立歴史博物館
- 小林 高 2010『東伴場地遺跡（第 7 次）一塚越稲荷塚古墳一』寄居町遺跡調査会報告第 33 集 寄居町遺跡調査会
- 埼玉県立さきたま史跡の博物館 2018『史跡埼玉古墳群総括報告書 I』埼玉県教育委員会
- 埼玉県県史編さん室 1986『埼玉県古式古墳調査報告書』
- 塩谷 修 1992「壺形埴輪の性格」『博古研究』第 3 号 博古研究会
- 篠田泰輔 2008「埼玉県における周溝墓出土の底部穿孔壺について一坂戸市木曾免遺跡の事例を中心に一」『研究紀要』
第 23 号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 城倉正祥 2009『埴輪生産と地域社会』学生社
- 城倉正祥 2011『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』奈良文化財研究所
- 関 義則 2019「埼玉古墳群とその歴史的展開」『徹底解剖！埼玉古墳群～副葬品から探る被葬者像～』
埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 高橋克壽 1994「埴輪生産の展開」『考古学研究会』第 41 巻第 2 号 考古学研究会
- 夢沼香未由 2019『磯浜古墳群 I－姫塚古墳・車塚古墳・日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳 平成 21～24 年度測量調査・
範囲確認調査成果総括報告書』大洗町文化財調査報告書第 24 集 大洗町教育委員会
- 田中 裕 2005「壺形埴輪と関東前期古墳一土師器とは異なる壺形埴輪の周知とその系譜一」
『千葉県文化財センター研究紀要』第 24 号 千葉県文化財センター
- 千賀 久 2008『はにわ人と動物たち一大和の埴輪 大集合一』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 伝田郁夫 2015「古墳時代後期における埴輪生産の変革とその背景一南武蔵を中心に一」『考古学ジャーナル』
No.667 ニューサイエンス社
- 伝田郁夫 2018「南武蔵における埴輪生産の様相一神奈川県川崎市高津区末長久保台 1 号墳の分析事例から一」
『史観』第 179 冊 早稲田大学史学会
- 中村倉司 2009『埼玉圏の原始・古代人一人の動きをモノから探る一』埼玉県立川の博物館
- 新納 泉 1984「関東地方における前方後円墳の終末」『日本古代文化研究』創刊号一 PHALANX 一
古墳文化研究会
- 萩原恭一 1994「房総における埴輪の変遷と分布」『研究紀要』15 千葉県文化財センター
- 橋本博文 1987「埴輪の出現一関東地方の場合一」『季刊考古学』第 20 号 特集埴輪をめぐる古墳社会 雄山閣
- 廣瀬 覚 2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社
- 廣瀬 覚 2019「埴輪の生産・流通からみた古墳時代の権力生成」『考古学研究』第 66 巻第 3 号
- 福田 聖 1998『末野遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 196 集
- 藤沢 敦 2002「東北地方の円筒埴輪一窯窯焼成埴輪の波及と生産一」『埴輪研究会誌』第 6 号 埴輪研究会
- 増田逸朗 1987「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』
- 山崎 武 2001「埴輪の生産と供給一埼玉県生出塚埴輪窯跡を中心として一」『ようこそ！はにわのふるさと
一関東の埴輪窯跡を訪ねて一』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 山崎 武 2004「埼玉県岡部町千光寺 1 号墳出土の埴輪について」『幸魂一増田逸朗氏追悼論文集一』
北武蔵古代文化研究会
- 山田俊輔 2008「雄略朝期の王権と地域」『史観』第 158 冊 早稲田大学史学会
- 山田俊輔 2011「毛野の埴輪」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学・別冊 17 雄山閣
- 山田俊輔 2015「中期の埴輪」『考古学ジャーナル』No.667 ニューサイエンス社
- 若松良一 1989『奥の山古墳 瓦塚古墳 中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第 7 集 埼玉県教育委員会
- 若松良一 2000「埼玉県における埴輪の様相」『古墳と埴輪』展示レポート 4
群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 若松良一 2001「武蔵埼玉古墳群と朝鮮半島系遺物一逆輸入された特異な埴輪をめぐる一」『古代史研究』第 18 号
古代史研究
- 和田晴吾 2004「巨大前方後円墳と王権」『オオヤマト古墳群と古代王権』青木書店